

「投稿が少ないとのことですが、この分野の研究者で人気の投稿先について、調査されたことはありますか。ライバルジャーナルの広報方法、運営等などが参考になるのではないかと思います」

グリーン 他の学術雑誌の編集の者と交流を持っており、情報交換を行っています。ですから、お互いに知恵を拝借しあっているつもりでいます。投稿論文の数が少ないと言いましたが、もしかしたら *Japan Review* だけの問題ではないような気がします。とにかく毎年この時期になると、つまり新年になると、果たして1号分の原稿が集まるのかと、もう9年もやっているのに、まあ若干ながら数は増えていっていると思いますが、やはり Web of Science などに登録しないことにはさらなる知名度、認知度の向上はあんまり期待できないのではないかと思います。

「IAB、International Advisory Board は、全員海外にいる研究者のようですが、理由は何でしょうか。どのぐらい日本人研究者を相手にしているのか、私が投稿者だったら、IAB を見てから少しためらいます。」

グリーン 「それは面白いご質問ですね。どなたのご質問（笑）、でしたでしょうか。なぜに、ためらうでしょうか。その辺を一言言っていただいてもいいですかね。」

質問者 「この質問をしたのは、31号と30号のコンテンツをオンラインで拝見すると、投稿者というか、著者は、もう9割以上、外国人のようです。でも内容は、日本学だと思い、この分野ではトップの研究者には日本人が絶対多いと思います。ただこれを見て、英語に対して、何かすごい厳しいのか、あるいは、実はもう外国人のための雑誌で、日本人の研究者は別にウェルカムではないのかと感じ、躊躇します。それならいっそ、別の日本語の雑誌に投稿する場合は、採択の可能性が高くなるのではないかと思いました。」

グリーン 「なるほど。決して日本人の投稿者を歓迎しないというわけではありません。ただ、英文の学術雑誌ですので、原則として、英語の論文を掲載する。原則としてというか、原理原則は英語の論文を掲載する雑誌です。当然、英語の優れた能力のある日本人の研究者はたくさんいます。彼らからの投稿はもう大歓迎で、実は毎号、日本人からの投稿があります。他方 *Japan Review* では、日本語のままで原稿を投稿していただいて、日本語のままで査読に回して、査読を通ったら初めて英訳するシステムもあります。

でも、この *Japan Review* の性格上、母国語が英語の執筆者がどうしても多くなります。日文研には、姉妹編、姉妹雑誌として、『日本研究』もありますので、そちらのほうに多くの日本人が論文を投稿しているわけですが、でも、ロブレグリオ先生のお話にもあったように、ぜひとも投稿してください（笑）。掲載してもらうには、ネイティブ・チェックをしてもらったうえで投稿されたほうが、当然、審査を通る確立が高くなりますが、でも決して歓迎しないわけではありません。」

「J-STORE や、プロジェクト MUSE、出版元サイトなど、複数のサイトから提供されたら、評価が下がるのではないのでしょうか。最近、ダウンロード数を評価に加える場合があります。Web of Science のように引用数で評価をするのであればいいのですが、最近、ダウンロード数で論文の評価をする動きがあるので、いろいろ散らしてしまうと、一つ一つのサイトのダウンロード数が小さくなってしまって、評価が下がるからいやだと、教員から言われたことがあって（笑）、どうなのかなと思ったのです。」

富岡 そのあたりの問題ですが、例えば今、オルトメトリクスに代表されるようにソーシャルネットワークでの影響度も評価の一つになっています。また、われわれ図書館が進めている（グリーン）オープンアクセスでは、本家サイトがあるのに、機関リポジトリにも登録しています。そうすると、機関リポジトリで提供すると評価が下がるの？という問題になってきますよね。しかし、そこはそれほど影響がないのでないかと。

EBSCO もそうですが、1つの論文は、既にいろいろなところで提供されています。また、最近では CC-BY で提供されるものも増えてきています。CC-BY ということは、本家サイト以外のどこに置いてもいいということですよ。となると、本家サイトでのアクセス数至上主義は、通用しなくなってきているという現状があると思います。そのため、私個人としては、そこはもう気にしなくてもいいのでないか、それよりも、もっと読んでもらうということが必要なのではないのでしょうか。可視性というか、言葉は悪いですが、下手な鉄砲も数撃ちや当たるというか、とにかくいろいろなところで見せて露出させること、それが重要だと思っています。

バデノック 一つ、この問題関連で、自分に実際あった経験をお話します。論文があるジャーナルに掲載されたあとに、論文をどこに掲載してもいい、例えば Academia に掲載してもいいし、SNS で発信してもいいという、覚書を書いたのですが、最終的にはジャーナルよりできれば自身のホームページ（メインサイト）にアクセス数を集約し、どの程度のヒットがあるのかを見ていきたいという連絡を受けました。これは一度は著作権を全部、著者にあげると言いながら、他方で、ジャーナルのメインサイトでヒット数を追っていききたいといういわば矛盾した話で、非常に複雑な気持ちになりました。著者としては、自身のネットワーク内でいろいろなところに出して、いろいろなところで読んでもらいたいという思いがありますが、ジャーナル側では論文のアクセス数をモニターしていきたいということがあったのですね。

鈴木 まずはそういうメトリクスを早くやめたほうがいい（笑）。そもそも。ほとんど意味がないから。ダウンロード数云々といいますが、ロボットによるアクセスやダウンロードだってカウントされる。先ほど紹介したように、SCI とか SSCI とか AHCI とかいったものにリストされている雑誌だって、実はほとんど読まれていない。だから、実際に読まれて引用されるような工夫が必要なのです。その点で、先ほど可視性を上げるにはという話をしましたが、たくさんチャンネル出すというのも可視性を上げる一つの方策だし、特徴を持たせて可視性を上げるというのも一つだし、いずれにしても、見えるようにするというのと、ダウンロード数で計るとは違うと思いますよね。だからまず、ダウンロード数で測るといような安易な計量化をやめたうえで工夫をする。そこへとらわれてしまうと、結局「Scopus に載っているからもう見えてるし、オープン

アクセスなんて必要が無い」なんていう話だけになってしまう。だから、もうそういうプローチ
変えたほうがいいのではないかなって思います。

「お話を聞く前に書いたので、既に講演の中で教えていただいた部分が多いのですが、例のところに書かせていただいたように、例えば著者の方だと、それは先ほどの（笑）、話のあとなので微妙ではあるのですが、著者の方からは統計数を知りたいとかいった要望が機関リポジトリ担当者にあります。あと著者の方は、どれぐらい読まれたかとか、見られたかということ、どうも気にされるというコメントをよくいただくので、そういうことに関して、どういうことをされたかを知りたいということと、実際に著者の方や読者の方からは、どういう要望が寄せられることがあるのかということも含めて、お聞きできればと思います。」

グリーン ありがとう。私の経験だけの話からも、読者から、今の所、どれだけ読まれているのかとか、そういうお問い合わせなどは一度ももらったことがないのですが、ただ、去年、おととしてしたかね、韓国在住の研究者からは別のお問い合わせがありあした。つまり、*Japan Review*に投稿したいんですが、EBSCOに登録されていますかと。韓国ではEBSCOに登録されていない雑誌に投稿しても評価されない、との話でした。いろいろなすったもんだがあったりして（笑）、最初はEBSCOに登録しようと所内で努力しましたが、タイミング的な問題があって、できずに終わってしまいました。このたぐいのお問い合わせなどは、これから増えると思いますよ。ただ、これまではヒット数だとか、どれだけ読まれているのかとか、そういうお問い合わせはまだ一度もいただいていないです。

一つ、つけ加えますと、多くの執筆者からは、JSTORに入っているか入っていないか聞かれます。入っています。

ロブレグリオ 恥ずかしい話ですが、先ほど言いましたように、『*Eastern Buddhist*』は、なかなか長い歴史があるのに、最近業績不振などの状況があって、学者は多分、『*Eastern Buddhist*』に一番いい論文を投稿していない（笑）。ほかのところにプライドのある論文を出して、そんなに読まれるようではない（笑）、論文を、『*Eastern Buddhist*』に投稿しているように、私も感じています。ジャーナルの内にいろいろなレベルの投稿があるので、これからの私の使命として、そのような考え方を革新しようと思っています。文化的な差もあります。もちろん皆さんがわかるように、研究者としては定期的に論文を出さないと仕事の問題になります。そして韓国と中国の研究者にとっては、『*The Eastern Buddhist*』という英語のジャーナルに、論文が掲載されたら、なかなか評判のいいことです。でも、アメリカとかヨーロッパの学者から、『*Eastern Buddhist*』よりもほかの色々なジャーナルに出したほうがいい、という評判も聞きます。これからそれを革新しようかなと思います。

「紙媒体を残すという選択をされた理由をお教えてください。お話の中でデジタルに移行していったらという話もありましたが、それでもあえて紙媒体を残しておられる、その理由は何なのでしょう。」

グリーン 世代の問題でもあるかと思います。将来的に、オンラインのみに恐らく移行していくと思いますが、私はとにかく、可視化の話も先にありましたが、新着雑誌のコーナーに *Japan Review* が必ずあると、見える存在として、実質のある存在としておきたいと思っています。ただ、今、2200部も毎月刷っています。その数を大幅に減らすことをそろそろ検討し始めたほうがいい気がします。

ロブレグリオ先生から紹介された *Japanese Journal of Religious Studies* は、こういった意味で先駆的で、多分、本はオンデマンドだけにしていると思います。それも一つのモデルでもあるかと思います。ただ、繰り返しになりますが、僕個人は本があつていいように思いますし、まあ自分の好みだから世代の問題でもあるかと思います。

ロブレグリオ 『Eastern Buddhist』でも、そういう話がありました。日文研と同じように、『The Eastern Buddhist』というジャーナルは、大谷大学と東本願寺の国際的な顔です。そして伝統があるので、これから少なくともあと10年間ぐらい、紙媒体で、そして10年間のあとでまた考え直そうと思っています。紙媒体を減らす可能性もありますが、近い内にやめようという気持ちはないです。

鈴木 私は学術書籍の出版という立場で紙の本にこだわっているわけですが、決して「守旧派」ではありません。事実、私どもから刊行した本のうち何冊かは、京大の学術情報リポジトリに上げていて、結構いろいろな成果は出ています。けれども、知のサーキュレーションにおいて、紙媒体を読んで手で書き込む、という身体行為は、非常に重要なのですね。2014年の『*Psychological Science*,』という雑誌に、紙のものとオンラインのもので学生を教育をした場合、紙のものの方が *conceptual question* (概念的な事柄) については明らかに定着率がいいという実験が紹介されています (Mueller, P.A. and Oppenheimer, D.M. (2014) The Pen is Mightier than the Keyboard: Advantages of Longhand over Laptop Note Taking, *Psychological Science*, Vol. 25(6) 1159-1168)。のべ327名のUCLAの学生を使ってやった実験らしいのですが、私はすごく大事なことだなと思いました。つまり、オンラインを否定するわけではないのですが、紙で、身体化される知識があると思うので、紙は要らないという議論だけはやめようねと(笑)、今は思っています。

「ORCID 登録が、国際発信力強化にどのようにつながるのか、もう少し詳しく教えてください。富岡さんへの質問が出ています。」

富岡 ORCID がどうして国際価値につながるかということですが、ORCID の担当者は、「ORCID はハブである」と言っています。ORCID がつながりの中心となって、いろいろなシステムにデジタルな情報の橋渡しをし、情報が流通できるようになっています。例えば ORCID に論文情報を登録しておく、他のシステムから自動的に取得することが可能になります。

出版社から出ているジャーナルだと、ORCID に論文情報を登録する道筋が既にあります。先ほど説明しましたように、CrossRef の DOI を使って、自動的に ORCID に登録してくれます。

ただ、紀要の場合、大手の出版社から出ているわけではありませんので、ORCID への自動登録はできません。そのため、リポジトリ経由で登録するしかないというわけで、KURENAI で登録流れを作りたいと考えています。

「ORCID についてですが、私は人文系ではなく自然科学系なのですが、アメリカの地球惑星地学連合ですと、ORCID をつけさせないと学会に投稿できないという流れにしようかという動きがあります。要は、情報集約をどんどんすることによって、アメリカの地学連合がよりプレゼンスを上げるということだと思います。ということは、逆にいうと大学側も研究者に義務として与えるという方法も一つの手ですね。そういった動きというのは今後考えられるでしょうか。」

富岡 いわゆる Mandate のことだと思いますが、ORCID は、オーサーファースト、リサーチャーファーストという考えです。そのため、研究者の方が、まず自分で ORCID の ID を取得し、大学や出版社に権限を与える、ということが重要です。また、登録した情報を公開する、しないというのはすべて研究者個人が決めるという仕組みになっています。大学の執行部としては、義務化したいというところが多分にあると思いますが、あくまでも ORCID は研究者が主体だということです。

「日本学の中で番有名な雑誌 *Japanese Journal of Religious Studies* や *Monumenta Nipponica* では、とても魅力的な編集者がずっと長く勤めて、その編集者はジャーナルの魂ではないかって思っています。ロブリグレオ先生もグリーン先生も研究者でいらっしゃる、編集だけが専門というわけではおられません、新しく編集長になられたときは、色々と問題が出てくるのでは羽化と思いましたが、うまくいきましたか。どれぐらいネットワーク、査読者とか編集者のお知り合いや同僚といったネットワークをおもちになっていましたか、またそうしたネットワークを引き継がれましたか。また、お辞めになるときは、誰にそれを伝えるのか、またそれはどれほど難しいのか、ご意見を聞きたいと思います。」

グリーン ありがとうございます。全く編者としても素人だったので、着任したときはすべてが出たとこ勝負という感じで、今でも暗中模索的な側面もありますが、International Advisory Board のメンバーに依存するというか、彼らの知恵を借りて何とか切り抜けてきたという感じです。IAB の構成は、世界各地でさまざまな分野、また年齢、ジェンダーなどバランスの取れた国際研究者にしているつもりです。まずは、彼らをベースに、彼らのネットワーク、彼らの人脈も利用してきたわけです。

私はあと3年で定年になって辞めますが、そのときに恐らく *Japan Review* の過去を振り返ってみると、編集長が変わると社風ではないのですが、雑誌のありようというか、体裁も含めて変わるので、それはとてもいいことで、継続性、雑誌をよりよいものにしていくうえでは継続性が非常に大事だと思います。『日本研究』のように2年で交代していくのだったら、アイデアを出すだけの恐らく元気がわかないでしょうし、どうせ2年で辞めてしまうということも考えると思うので、日文研の *Japan Review* の編集体制で本当にいいと思うのは、継続性です。次の後任は誰なのか、どうやって引き継いでもらうのか、まだわかりませんが。

ロブリグレオ 今、本当に素人ですから、大学の時からの友達たちやグリーン先生に頼っています。今週、南山大学にもいく予定です。編集者についての本などいろいろと読みまして、このような編集者ネットワークのセミナーに入っているいろいろと頑張っています。

バデノック 東南アジア地域研究研究所の『Southeast Asian Studies』というジャーナルのエディターとして、いろいろ今日のお話を大変興味深く聞かせていただきました。大変勉強になりました。

このジャーナルの知名度を上げる、認識度を上げる、発信力、国際的な発信力を強化するということを考えるときに、こうやって近くにいる人たちで集まって情報交換や意見交換をし、経験者の方や新しく編集委員になられた方も一緒になって話をするのは非常に意味があると思います。ですが、国際発信力ということで、ここから日本のジャーナルをどうやって国際的なものにしていくかという問題は、日本から考えていくということはある意味では自然なことかと思いますが、民間企業的に考えてみて、ジャーナルはみんな自分たちの競争相手であり、市場をどこまで把握しているのかということをよく自分の委員会でも話しています。

国際化を考えるときには、もう日本でこの近く、皆さんでできること以上にアジアにいますから、こういった問題、国際化、どうやって発信力を上げていくかというのは、毎日皆さん自分の仕事の中ですごく東南アジア研究所的な問題なのか、京大的な問題なのか、関西的なもの、日本的な問題、どこまで日本的なのかというのは、これは中国、韓国、台湾とか見たらみんなおんなじような問題に向かえているとは思いますがね。

言葉の問題もそうですし、論文の数を増やしていきながら、質を上げていくという今日お話にあったような大変難しい質問がたくさんあるのですが、もう少し広く見て、国際的な国際化を考えるような方法を探さうほうがいいのではないかと思います。もっと大学でできることとして考えられるのは、例えばケーススタディをアジアでいろいろな分野、自然でもいいし文系でもいいし、いろいろな国ではどういうことをやっているか。まさに今日、お話いただいた内容をもう広く、だいぶ広くいろいろなところで情報を集めて分析して、それをまた議論のネタにしたらいのではないかと思います。

まず日常的にお互いのリソースをどう分かち合えるか、ということは非常に重要ですが、将来を考えるときにはオプションとして何が考えられる。今日のグリーン先生のイノベーションは非常に面白かったのですが、ほかにもいろいろなところでいろいろな状況の中で、いろいろなことをされていると思いますよね。そういうところをグローバルな、あるいはリージョナルな地域で多様な知見が得られるようにするのは大事ではないかと考えます。今回のように割と多様で小さい親密な話から一段とスケールを上げて、もっともっと多様なイノベーション、いろいろな問題に対する考え方などを取り入れることができれば、もっと広い世界が見えて、いろいろな解決方法があるのではないかと思います。

神谷 われわれ URA は、教員、大学執行部、事務部、一般社会、それからファンディングエージェンシーの要望、あるいはそれらに対するわれわれの要望を右から左へ、上から下へ、下から上へ動かす、そういうような仕事をしております。この紀要の研究会の構想も、当初設楽先生からわれわれのほうにご相談いただき、それではこういう機会を作ったらいい、そのためにはこういうお金を取っていけばいいというふうに提案させていただくなどして、過去1年ぐらい支援させていただいております。今後ともこのような研究会ないしは取り組みについて、ご協力さしあげていきたいと思っていますし、本日もご出席いただいた先生方、ご参加いただいた方々とも適宜情報を取り合い、紀要及び学術誌の発展について議論を重ねていくことができればと思います。本日は長い間どうもおつかれさまでした。ありがとうございました。